

ては、これまで比較神話学者、考古学者、民俗学者など、各分野の学者によって、いろいろな説が出されて来た。その主なものは、古墳説、洞穴説、殯宮説の三つであると言つて良いと思う。だが、いまだにこれと言つた確定的なものを出されていない。

私は、黄泉国Ⅱ横穴式石室と考え、しかも根底には殯宮の精神が流れていると考えた。これを説明する上での好材料は、イザナキが黄泉国から逃げ帰る時に用いた様々の呪物と、古墳の副葬品との関係である。

ここで指摘したいことは、「ナゲグシヤム」という思想が、考古学の報告書に反映していないことである。この思想を知つた上で報告書が書かれていれば、国文学の研究の上にも大きく影響して行くであろう。学界の意見交換の必要性を痛切に感じた。それをなす遂げることは、容易ではないが、私たちの世代が実現への努力をしたいと思います。

## 〈挽歌〉——発生と人麻呂以前——

第四回卒業 伊藤 和子

日本の文学史上、「挽歌」という語は万葉集にのみ現われたのであり、それ以前の文学はもちろんのこと、それ以後の文学においても現われることはなかった。しかも、「挽歌」は「雑歌」「相聞」と並んで万葉集の三大部立を形成しており、万葉集においては非常に重要な役割を果している部立ということが出来る。そこで、このように万葉集において大きなウエイトを占める「挽歌」が、何故万

葉以前、及び万葉以後における文学に全く存在しないのかという疑問が生じてきたのである。そしてこの問題は「挽歌」の本質という問題とも関連を持ち、かなり広い範囲にわたつて考察を進めなければ解決がつかないように思われた。つまり、「挽歌」の発生という問題から始まり、「挽歌」が万葉集の中でどのように展開していったか、又、質的にどのような変化を見せていったかということを考えなければならぬのである。以上のような流れを明らかにし、その中の個々の問題が解決された時、何故「挽歌」が万葉集のみに現われたのかという問題も、自然と解決され、「挽歌」の本質に一步でも迫り得ることが出来るものと思われた。

そこで万葉集における「挽歌」の展開の跡をたどっていくわけなのであるが、便宜上、「挽歌」の頂点を形成した人麻呂を中心に、人麻呂以前、人麻呂、人麻呂以後の三つの時代に分けて考察を進めていくことにした。そして今回の卒業論では、「挽歌」の発生から人麻呂以前という初期の部分だけの考察にとどまってしまうのである。

まず第一章では、「挽歌」の意味と範囲を規定しなければならぬということ、『文選』における「挽歌」の意味の検討、万葉集の「挽歌」と『文選』の「挽歌」との比較ということを通じて、万葉集における「挽歌」の意味と範囲を明らかにし、「挽歌」の外面的位置づけをおこなってみた。

第二章においては、古代人が「死」ということに対してどのような感情を抱いていたかということを考えてみた。「挽歌」はあくまで「死」に関する歌であり、「死」及び「死者」と密接な関係を持っている。従つて古代人の「死」に対する感情を明らかにすること

によって、「挽歌」の発生という問題に対し何らかの解決がつかぬのではないかと考えたのである。

「挽歌」の発生という問題に一応解決がつかないところで、万葉集の「挽歌」の具体的な考察に移るのであるが、第三章では、有間皇子の自傷歌二首という小さな部分について考えてみた。この二首は「挽歌」に分類されていながら「挽歌」的性格の稀薄なこと、歌の背景に複雑な事情のあること、万葉集編纂者の意図が加味されているらしいことなど数多くの問題をかかえており、独立させて考察を進めていくのが妥当ではないかと考えたのである。

第四章では、近江朝の「挽歌」九首について考察を進めていった。万葉集の「挽歌」は事実上、近江朝の「挽歌」によって始まったと考えられる為、この一群の「挽歌」が占める文学史的意義は非常に大きなものであると思われた。そこで記紀葬歌との関連と人麻呂との関連を考え、こうした外側からの位置づけと、近江朝の「挽歌」自身の持つ性格とを明らかにしていく方法を取り、これら九首を「挽歌」の流れの中にはっきりと定着させてみたのである。

以上の四章で「挽歌」の発生から人麻呂以前をまとめたのであるが、これから先の展開については、又、機を改めて考えたいと思っている。

## 〈日本永代蔵論〉

第四回卒業 伊藤 友子

好色物作家西鶴がそれまで書き続けてきた「好色物」執筆の筆を

折り、町人物作家へと転換した。その「町人物」の第一作である『日本永代蔵』は、一般に教訓書としての評価がつけられている。

しかし私は西鶴の「好色物」における作品の傾向、それから『永代蔵』の内容から考えて、教訓書とみる点に疑問を抱いた。そして教訓書としてよりも娯楽書としての『永代蔵』を捉え、この点を中心に作品論を進めていった。

全体の論を大きく二つに分け、第一章を『永代蔵』の教訓性に関して、第二章は娯楽性に関して各々述べてみた。

まず第一章は、最初に『永代蔵』の教訓性に関する諸氏の説を載せ、以下主に最も問題になっている副題と最終章末文に関して一つ一つ反論していった。それをまとめると、作品の最初と最後はある程度誇張がある。まして西鶴の文章には顕著である。又、「大福新長者教」という副題は、寛永四年に書かれた純粹な教訓書である『長者教』のパロディであろう。以上の事から、この二点を根拠とし『永代蔵』を教訓書とみるのは不十分であるとした。さらに作品を考察しても、『長者教』に示されている教訓と同じ、言わば常識化している教訓談が書かれてある。さらに、不正行為による金儲けを肯定したり、話の矛盾も多い。又『永代蔵』刊行以前の経済社会が背景で、時代に即した教訓にならない。主に知識階級層を讀者としている点等から考えても、これを単に教訓書とするのは早合点すぎるのである。

第二章では、『永代蔵』の内容から考察される娯楽性に関して多方面から検討してみた。ここで特に注意せねばならないのは、西鶴の知識の広さと、それをうまく使いこなしている才能の豊かさである。文体の特徴は当然「好色物」からの系統を引いている。例え